

今年も、4月29日から30日の2日間、附属校新任教諭APU研修が実施され、この4月から各附属校に着任された新任の先生方がAPUを訪問しました。このAPU研修も、附属校の教員自身が「生徒に『APUの魅力』を語れるようになる」ことを目標に、2005年度から継続し、今回で8回目となりました。

APU通信では、今号よりリレー形式で、『教員の視点から見たAPU』をお届けします。

「APUの魅力について」

立命館小学校 新田隆子

APUについては、外国からの学生が多く、国際的な環境で語学力が身に付く大学というイメージしかもっておらず、どのような大学であるのか実際にAPUに行けることを楽しみにしていました。

短い研修期間でしたが、APUの特色や何を目指しているのか、この環境の中で、学生は何を学び取らせようとしているのかの説明を受けたことと、実際の学生と関わって感じるが見事に一致していることがすばらしいと思いました。

3つの「50」というフレーム「国際学生50%、学生の出身国・地域、50カ国・地域以上、外国籍教員比率50%以上」という環境の中で、日本人と国際学生が授業や課外活動、APハウスでの生活などで交わり合うような仕組みや仕掛けが意図的に設定されており、日本人の学生も国際学生のどちらもが、その環境を生かすことができるかどうかは、自分次第であるということをよく認識していることがすごいと思いました。主体的にどの学生も、それぞれが学ぶ意味や将来への夢をもっており、高い異文化受容力、国境を越えたコミュニケーション力を身につけた優れたグローバル人材として、国際社会にどのように羽ばたいていくのかがとても楽しみです。また、APU入学部長の近藤先生が、体験型授業の授業について、「このような授業で、ディスカッションし、自分でまとめ、共有していく学習を多く積んでいく。答えのない授業で、とにかく苦しみながら葛藤に耐えていける強さを育てていきたい。APUには、かわっている子、のびたがっている子、学びたがっている子に会って欲しい。変人がばつではない。」と言われたことが印象的で、スケールの大きい人材が育っていくことだろうと思いました。

インタビューした学生は、みんな丁寧に、一生懸命答えようとしてくれました。外国に学びに来ることで、自己管理の大変さもあるが、将来、「自国でプロフェッサーになり、貢献したい。」「日本で就職したい。」「国際的な貿易の仕事につきたい。」「すでにIT企業に就職している。」など、将来への夢を明確にしている学生がほとんどでした。また、「この学校で学ぶことでプレゼンテーション能力が確実に付いた。」と胸を張るように語った学生もいました。APUという環境の中だからこそ学べた事を意味付け、価値付けしたり、自分で決定していく力が付いたりしていくのだと感じられました。

インタビューしている学生のそばにいた日本人の学生が、「この学校は、外国人を外国人という見方をしないところが他の大学とはちがうところだと思う。自由と規律のある大学だと思う。」と語ってくれたことも心に残りました。

また、キャンパスの中には、車いすの学生も多くいました。こんな大学だからこそ、障害のある学生にとっても、おそらく、助け合うことが自然にできる学びやすい環境なのだろうと推察することができました。

学生達のプレゼンもすばらしいものでした。「APUは、世界にでる準備をする場所、世界と戦うのではなく、世界を味方につけられる力を付けていきたい。」という言葉に、国際社会においてリーダーとして活躍できる人材が必ず育っていくことだろうと確信することができ、立命館の出身として、誇らしく思いました。



APU通信



立命館慶祥中学校・高等学校 渡邊 文子

大分県別府市の市街地からバスで 30 分程，山を上ったところに広いキャンパスが広がっている。高大なキャンパスというのは，地方の大学ではそんなに珍しいものではないかもしれない。しかし，ここのキャンパスはよく整備されているのだ。別府湾が一望できる屋外の階段状のスペースでは，暖かな日差しの中，友達とのランチをしている学生，熱心に勉強している学生など，みんな思い思いに過ごしていた。

ただ，普通の日本の大学と違うのは国際色の豊かさだろう。ここでは日本人と同じように 4 年間で APU で過ごす外国人学生(留学生ではなく国際学生と呼ぶ)が全体の 45% もいる。そしてその国際学生は最初の 1 年間で AP ハウスと呼ばれる学生寮で過ごす。AP ハウスには日本人学生も住むことができるが，希望者が多いため成績



順で決まる(ただし，学内推薦の学生は入りやすい)。ここは個室タイプとルームシェアタイプの 2 タイプがあるが，どちらに入るかは運次第。とはいえ，どちらの部屋であっても国際学生と交流を深めることは簡単だ。各階にキッチンがあり，ここに来ればみんなが集まってくる。イベントも多く，もちろん自ら企画することだってできる。ここで交流を深めて，2 年目からは下界(別府市街のこと)で国際学生とルームシェアをする日本人学生もいる。

大学生の生活の中心は授業だろう。APU ではクォーター制を取り入れている。普通の大学では 1 つの授業は週に 1 コマ，半年かけて単位を修得する。しかし，APU では週に 2 コマ，7 週間で単位が習得できる。また，全ての講義のうち 80% が日本語と英語の 2 クラス開講しているのも特徴の 1 つである。しかも，英語での授業を一定単位以上選択しなければ卒業できないというハードルもある。



また、グループディスカッションなど，みんなで意見を出し合うことも多い APU では図書館も一味違う。夜 12:00 まで開いており，いわゆる静かに勉強する場所というのは 2 階部分のみ。1 階は本棚の他に話し合いをしてもいい勉強スペース(写真上)とグループで討議しやすいように壁がすべてホワイトボードからなり，アイディアを自由に書き出すことができる小部屋(写真下)がある。忙しい APU 学生は 19:00 頃からグループディスカッションを始めることもよくあるようだ。



このような制度や施設もあり，APU の学生はしっかり勉強し，そして社会に求められる人材になっていく。

APU ではそれぞれ 2 ヶ月ずつある夏休みと春休みを有意義に使っている学生が多い。国内や海外でボランティア，1 ヶ月かけて世界中を一人旅など，やりたいなと思うことを積極的に実行しているのだ。2 ヶ月という長い期間を自由に使えるのは，大学生だけの特権だ。物怖じすることなく世界に飛び出していくことが，社会に出てからの力になる。APU の学生は世界と戦うのではなく世界を味方にする術を知っている。

ただ，APU に入れば，誰でもこのように成長できるわけではない。どんな環境にいても何もしなければ，変わらない。この環境をどう利用するかは自分次第だ。興味をもったらまず行動。APU について，もっと深く調べてみよう！



APU 通信

立命館守山中学校・高等学校 奥成正志

APU の魅力は数多いが、ここでは 3 つの点に絞って紹介したいと思う。

[1] 生きた語学力を身につけられる

APU には世界各国から多くの学生が集まっている。(実際 10 人の学生にインタビューしたが、全員異なった国の出身だった。)例えばフランス語を学びたいなら、写真のように言語パートナーを募集し直接ネイティブから学ぶことができる。しかも、約半数が国際学生だから、ほとんどの言語を学べる。まさに日本に居ながら留学できるようなものだ。



[2] 外国の生活も体験できる

1 年目は多くの学生が AP ハウスという寮で共同生活を送る。(全員が入居できるわけではなく、一説によると大学に入学するよりも、この寮に入るほうが難しいらしい。)2 人部屋になれば、パートナーは国際学生である。文化も習慣も異なる学生が 2 人で共同生活をする。これも居ながらにして、ホームステイをするようなものだ。また、フロアごとに夕食を共にしたり、パーティがあったり、人気が高い理由もうなずける。



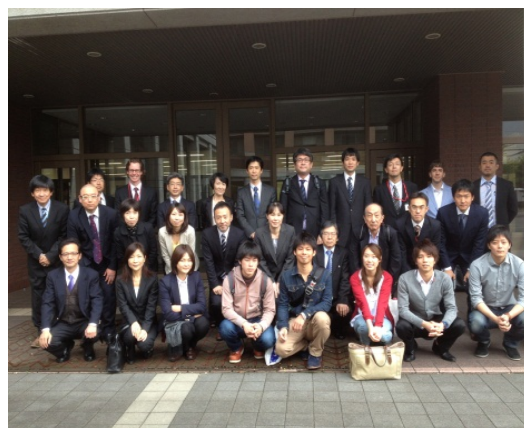
[3] 世界に飛び立つ若者たちの「巣」

何人かの学生たちのプレゼンテーションをきかせてもらった。
タイへの援助を行っている NGO 団体を運営している学生。
世界の各国を次々とまわり、自分の夢を見つけようとしている学生。
APハウスのリーダーとして、国際学生と日本人学生をまとめている学生。

どのプレゼンテーションも本当に素晴らしかった。プレゼンテーション能力も素晴らしいが、何よりその内容に感動した。本当に自分のやりたい事をみつけているだけでなく、それらがきちんと社会(世界)とつながっている。ただ、多くの学生が強調していたように、APU に進学するだけで、突然何かができるようになるわけではない。学ぶ目的と強い意志を持つもの、自分を変えて成長したいものにはどんどんその機会が提供される。

まさに、世界に飛び立つ準備をする若者たちの「巣」だ。

(写真は学生たちとの記念に撮ったもの)



2013 年度附属校新任教諭 APU 研修

Ritsumeikan Uji PRYDE Mike

APU is a very international campus. Being international means not only that students can speak more than one language, but that students are always ready to explain their point of view and assert their life background in a respectful and polite way according to the person they are talking to. In this way the students are representatives of their countries. It is a chance for all students to learn about other people from these cultures and to communicate with respect and knowledge. I was impressed by all of the students that I met. Even if they made mistakes with their English, their message and meaning was very clear, so there was no problem with communication at all. Even the food that was served in the cafeteria was very international, ranging from green curries, vegetarian, as well as traditional Japanese food. The whole campus buzzed with many languages and cultures. The chance to speak English was everywhere. Signs explaining voluntary activities and clubs in the campus were all written in more than one language, and students were always ready to explain about them in any language. A feeling of being immersed in a global village was everywhere. The students always show initiative and are willing to show sensitivity and commonalities to the person that they are speaking to. Everybody was confident and each had an air of internationalism about them.

The classes that the students attended were structured differently to what the classes are traditionally like. All of the classes have project and group work, which means that there is a lot of discussion and chances to speak English. Students have to present their findings from a number of different perspectives about different topics, which with practise, leads you on the way to becoming a leader. Some of the students gave us some presentations. These presentations were very well thought out, organised, and involved powerpoint, quizzes, videos, and physical materials as examples. The students also gave clear and knowledgeable responses to the questions that were asked at the end. There was always a sense of involvement made by the students and everybody encouraged people to speak out, in spite of language barriers.

Many of the students are highly involved with volunteer work around the world. These are non-governmental organisations that focus on support and education in underdeveloped areas. The students use their class studies to learn about these countries and how to best arrange aid, education, friendship, or experiences with them. The students made it clear that the work that they did was very rewarding and gave them an opportunity to put their studies into reality. In this way, the APU classes are not theoretical, but are very practical. Solutions to problems are first discussed in groupwork from various perspectives. Therefore, direct action is given based on research and class opinion. The motto "Beyond Borders" is certainly carried out at APU. The chances to join these groups are very easy, and the chances to continue with an aim to future employment is also a very realistic goal of many of the students.

The dormitory at APU is also very communal. Many students cook together in the many kitchens around, as well as discuss the issues of the day. Study groups, meals, and excursions are often organised, and of course the main language is English. There is also a fresh market that comes especially to the dormitory, so that fresh fruit and vegetables can often be purchased.

If I was a student wanting to reach out and make a difference to the world, then APU would certainly be my first choice. APU is a university that would give me the skills and knowledge to be a global leader.



立命館小学校
高橋 正英

これからの大学の新しい形 APU

日本企業の生産や販売先が海外に広がってきている現在、それに伴い採用もグローバル化していることに驚いた。時代は確実に動いている。したがって、時代の変化に対応できる人材を育成する学校も変化しなければならないであろう。これからの社会に求められる人間像を考え、そのような力を備えた人間育成に務めていく必要がある。企業と大学の連携の新しい形という APU の提案が、やがて「これからの大学の形」のスタンダードになっていくのではないだろうか。

入学部長 近藤祐一先生の体験型授業では、私たちが今の自分を表現することで、学び合い、よりよいものに迫っていくという学校ならではの授業を味わうことができ、大変刺激的な時間となった。このような授業を具現するためには「学生の多様な考えを引き出すような魅力的な課題創り」や、近藤先生がやられていたような「ファシリテーターの役割」、そして「学生に本来求める力を適切に評価していくための方法の研究」などが我々教師に求められる。教師の指導力がこれまで以上に問われることになるが、このような授業を積み重ねることで、学生には本当の意味での思考力・表現力がはぐくまれていくであろう。



世界を見方につける力を

国際学生を対象にインタビューさせていただいた。「どうして APU を選択したか」と「APU のよいところ（入ってみてどうだったか）」を柱に質問すると、どの学生も APU での学生生活に満足していて、自分のやるべきことやこれからどうしていきたいかしっかりとビジョンをもち、生き生きと学ぼうとしている姿が印象的であった。また、インタビューに答える学生のすべてが礼儀正しく、笑顔で、ユーモアを交えて話す姿に大変好感がもてた。

研修最後のプログラムでは、附属校出身生によるプレゼンテーションが行われた。どの学生の発表も、大変堂々としており、自分の体験をもとにした思いが伝わるものであった。特に発表の中にあつた「(APU は) 世界を見方につける力を身に付けられる場所」という言葉に感銘を受けた。まさに、今とこれからを担う日本人に求められる考え方であると思う。彼らのような素晴らしい学生を育成し、このような実感を伴う言葉を言わしめたことこそが APU という学校の何よりの魅力であると感じた。



Shape your world ~ 自身、世界を創造する ~



たいてい、器物には年月をわすれがたうキリキリの生衣を、PCだうゆい、スパン、サキ

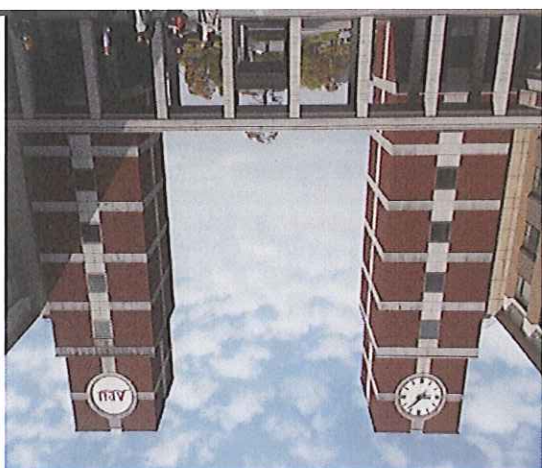
「あ、お母さん。さういふと、

。あちぢぢに
 暗へいぢぢにたまうと廻廻兼焚た
 うてふん。あはれなうし廻を直けき
 入り替田・廻をけき入り替来返の事
 田替并、ひやぎぎまうてん！。こゝろ
 せけん！。こゝろせけんおし、たと
 用たりんやめく廻田替ぎ。こゝろに
 けけんかききんやけんけんひやぎぎ
 のん、んがけけんかききんや。

[illegible][illegible]

महाराष्ट्र के राजा

人として加害者
 へんせい入る価値あるか否かは正確
 に正しく知ることが出来、それが正
 義論・道義論、人としての。必ず誰か
 事柄にその是非があるから、必ず
 人々も必ずその価値があるから
 。その是非がその価値の判断の
 ために必要であるからである。それ
 は、その人としての是非がその
 価値の判断の目的であるからである
 価値がある、その価値がその価値

[illegible][illegible]

මන්දාගමයාට
ආගමයාගේ ස්වභාවය
විස්තරයෙන් දැන
ගන්නා බවට පත්
වීමට හේතු වූයේ
මෙම සිද්ධියට පමණි.

バブーだーいっ
...おそろしー

APU

立命館中学・高等学校

翻滾上甲